

## Gifted 者のキャリア決定に関する研究の動向

## Research Review of the Career Decision Making of Gifted

熊谷歩南\*, 小倉正義\*\*

\*兵庫教育大学大学院 連合学校教育学研究科

\*\*鳴門教育大学大学院 教授

KUMAGAI Honami\* and OGURA Masayoshi\*\*

\*The Joint Graduate School in Science of School EducationHyogo University of Teacher Education\*\*The Graduate School Naruto University of Education

抄録：わが国の Gifted 者に関する研究は学齢期の困難さに着目したものが多く、その後の経過や進路に着目したものは少ない。成人以降の Gifted 者のメンタルヘルスには、学齢期の学校適応と同様に職場への適応が大きな影響を与えており、キャリア決定は今後の人生を考える分岐点になっていると考えられる。青年期の Gifted 者にとって、キャリア決定はアイデンティティの確立に関する重要な発達課題であり、Gifted 者へのキャリア支援を考えるにあたり Gifted 者独特のキャリア決定に関する研究が必要とされる。そこで本研究では、これまでの Gifted 者のキャリア決定に関する研究成果から、キャリア決定に影響を与える要因を整理し、キャリア決定上の困難との関連を検討する。また、わが国における Gifted 者に対するキャリア研究の今後の展望を述べる。

キーワード： Gifted, キャリア, 職業選択, レビュー

Abstract: In Japan, studies on “gifted person” are focused on difficulties in school-aged children. There are limited studies that focus on progress after school or the career. Adjustment to the work place greatly influence the mental health of gifted adults. In addition, career decisions are the bifurcation point that shape the rest of their life. For gifted adolescents, career decisions are an important setting for developing identity. Therefore, when considering career support for gifted person, it is important to study their unique career decisions. This study summarizes the career decision-making factor of gifted and examines the relationship between these factors and the difficulties that occur during career decision-making. In addition, the study discusses possible future research on career studies on the gifted.

Keywords: gifted, career, career decision, research review

## I. 問題と目的

## 1. Gifted とは

近年、Gifted と呼ばれる者への注目が集まっている。2021年~2022年には「特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議」（文部科学省，2022）も開催され、その頃からテレビや雑誌等でも度々取り上げられるようになってきている。しかし、Giftedへの注目は集まり始めたばかりであり、Gifted者への理解は十分に広まっている段階ではない。国内においては、「ギフテッド」という用語を用いて説明されていることが多いが、対

象となるイメージは論者により異なっていることが指摘されている（文部科学省，2022）。イメージや訳語の違いによる混乱を避けるため、本研究においては、英語表記の「Gifted」を用いる。

Gifted教育が盛んなアメリカでは、Giftedは「知的、創造的、芸術的、リーダーシップ能力などの分野、または特定の学問分野で高い達成能力の証拠を示し、それらの能力を完全に開花するため学校が通常提供しないサービスや活動を必要とする学生、子ども、または若者」と定義されている（小林，2021）。この定義に基づいて考えると、Gifted者が高い能力を示す分野は多岐にわたっている。有識者会議においても、「才能を示

す領域は、学問分野ごと（教科ごと等）、芸術、スポーツなど様々なものが想定される」と述べている。また、才能という言葉が示す能力の程度については「非常に高いIQで示されるような極めて突出した才能に限られるわけではなく様々な程度が想定されるものである」とも述べており、Giftedという言葉が示す範囲は広いものであるといえる。Giftedを対象とした研究を進めていくうえで、多岐にわたる様々な能力を持つGifted者を想定することは重要である。しかし、Gifted教育へのプログラムがないわが国においては、多彩な才能を客観的に測る基準を設けることが難しく、実際には知能検査の結果を基準に研究が行われていることが多くなっている。

## 2. Gifted 者の困難

Gifted 者は優れた能力を示す一方で、独特の社会面・情緒面の困難を抱えているとされている。2021年に文科省が実施したアンケート調査では、得意な才能のある児童生徒から「わからないふりをすることも苦痛で、授業の中に自分を見出すことができなかった」「あまり周りに理解してもらえない」「何をやっても手本や代表に選ばれて（中略）疲れて不登校になった」といった声が報告され、保護者からは「授業がつまらなく登校しぶりがあった」「みんなと違う部分が強調され、いじめの標的になりやすい」などの声が報告された。Gifted 者は学校生活で周囲との馴染めなさを感じており、不適応状態に陥りやすいと考えられる。

Gifted 者の同年代集団との難しさは国内外の研究で報告されている。Gifted 者は幅広い分野に興味を持つことから、それぞれの興味に合った複数の仲間集団を必要とすることが多い（Webb, 1994）。同年代より年上との交流を好むことから、学校生活の中で自身の興味に合った同年代集団を形成することが難しくなっていると考えられる。また、Gifted 者には生得的な激しさがああり、それが原因で刺激から受ける経験が増幅され刺激への反応が増幅される OE と呼ばれる特徴（Overexcitabilities 過度激動/過興奮性）がある（Piechowski, 1979）。この概念を提唱したドンブロフスキーは、OE による強い精神反応が子ども自身や他者との間に葛藤を生む可能性を指摘していることが報告されている（日高, 2018）。

非同期発達と呼ばれる発達の偏りも、Gifted 者の仲間集団の形成を妨げている要因の一つであると考えられる。Gifted 者の中には、優れた能力で認識した問題に対処できるだけの身体的・情動的な発達が伴っていない場合がある。このよう

な発達の偏りは、Gifted 者に心理的な緊張をもたらすことがあるとされており（Fornia & Frame, 2001）、非同期発達のある生徒は、周りから孤立し友人を作ることに困難を経験すると指摘されている（Blass, 2014）。OE や非同期発達などの Gifted 者の特性は、友人関係や仲間集団の形成と適応に影響を与えていると考えられる。

## 3. わが国における Gifted 研究の動向

わが国における Gifted 研究はまだ多くはなされていないが、教育面に焦点を当てたものと、困難さに着目したものが見受けられるが、本研究においては、困難さに着目した Gifted 研究についてまとめる。

松本・是永（2017）は、諸外国においては Gifted 教育の対象になると思われる日本の小学生の当時者への聞き取り調査を行い、小学校における教育的ニーズをまとめている。具体的には、高機能自閉症のある4年生の2E児（Gifted と発達障害を併せ持つ児童）について、就学前の生活の様子と学校生活の様子を本人と保護者、在籍する特別支援学級担任から聞き取っている。聞き取りの内容から、特別な教育的なニーズを考察し、小学校における支援のあり方を検討している。小泉（2014）は、実践を通して出会ったLDのある2E児の事例を報告し、保護者の相談内容から学校や日常生活での共通する困難さについてまとめている（小泉, 2016）。日高（2018）は、WISC-IV で全検査IQ、言語理解、知覚推理のいずれかの指標で130以上を示す児童を対象に、WISC-IV の得点と Vineland 適応行動尺度の結果の関係を考察している。宮尾（2019）は、自身の発達クリニックを受診した Gifted と考えられる子どもの症例を報告し、学校での適応スキルについて検討している。これらの研究は、Gifted を対象に行われた数少ない研究であるが、いずれも学齢期の Gifted 者の困難さや学校適応の様子についての横断的な研究や事例の紹介である。縦断的な研究としては、本郷ら（2022）の研究が挙げられる。本郷らは、Gifted 全般の傾向ではなく個人の環境と適応・不適応の変化の方向性から支援方法を検討することを重要と考え、Gifted 児の年長から小学校6年までの発達過程と学校適応に焦点を当てた縦断研究を行った。この調査から、発達のな変化やニーズの変化、それぞれに時期に必要とされる支援のあり方などが明らかにされた。

わが国における Gifted の困難さに着目した研究は、特に小学校までの学齢期に焦点を当てたものが多い。これは、当事

者や保護者、関係者にとって、学校での適応が大きな課題となっていることが関係していると考えられる。Gifted 者への支援のあり方を考えるにあたり、学齢期での困難がその後の人生にどのようにつながっているのかという視点は重要であるが、学齢期以降の経過や進路に着目した研究はわが国では行われていない。

#### 4. わが国における職業選択上の問題と研究動向

エリクソン, E.H.は、多数の同一化群が青年期に社会的役割の獲得という形で統合され、アイデンティティの確立に至るとしており、その社会的役割の獲得において中心的な位置を占めるのが、職業決定であるとされている(下山, 1986)。また、近年の研究では、フリーターやニート、離職率などの問題から、大学生が職業選択やその後の適応に問題を抱えていることが指摘されている(安達, 2004)。なかでも、職業未決定という問題は職業選択上の問題として取り上げられており、この問題に影響する要因について研究が行われている。

下山(1986)は、職業未決定がアイデンティティの拡散・危機の表れであるという視点から、“職業未決定のタイプ”と“自我の確立”の関連性を検討した。また、若林ほか(1983)は、“自己概念”が発達段階を通じて人々を仕事や職業興味へ結び付ける機能を果たしていることから、“自己概念”と“職業意識”や“職業選択”との関連性を検討した。自我や自己意識の視点の他、自己効力感と職業選択との関連を検討する研究も多くなされている(浦上, 1995; 浦上, 1993; 安達, 2021)。進路に対する自己効力感とは、Taylor&Betz が提唱した進路を選択・決定する過程で必要な行動に対する遂行可能感とされる(浦上, 1995)。進路に関する意思決定への取り組みやそのためのスキルについての自信のなさ(自己効力感)が進路不決断の規定要因であることが示されている(Holland & Holland, 1977)。また、職業未決定と就業に関して持つ動機付けの関連を検討する研究も報告されている。安達(2001)は、Blustein の研究成果から内発的に喚起された動機が青年後期の就業行動に重大な影響を及ぼすと指摘しており、内発的な動機付けが職業未決定に抑制的な影響を及ぼすと考えられている。萩原ほか(2008)は、自己決定性に着目し、“やりたいたいこと探し”に対する動機における自己決定性の違いの進路不決断への影響を検討している。

#### 5. Gifted 者のキャリア研究

学齢期の Gifted 者の困難として、学校適応が報告されてい

るように、成人以降の Gifted 者にとっては、職場での適応がメンタルヘルスに大きな影響を及ぼしていると考えられる。大人の Gifted に関する文献のシステマティックレビューを行った Rinn&Bishop (2015) は、多くの研究で Gifted 者が仕事への満足感を感じていると報告している一方で、Nauta と Corten の調査を取り上げ、職場環境が Gifted 者のニーズや特徴に資するものでない場合、仕事への困難さを抱えることを指摘している。Gifted 者にとって、キャリアを決定する場面は、その後の人生においても分岐点の一つとなっていると考えられる。

また、多くの大学生と同様に Gifted 者も進路決定の際に不安を強く感じていることが報告されている。Stewarts

(1999) は近年の研究成果を取り上げ、53%の Gifted 者が困難を感じており、進路に関する支援を求めていることを報告している。また、Karnes&Oehler-Stinnett (1986) は、Gifted 者が Non-Gifted 者に比べて「課題の達成」「社会的身分」「キャリア願望」で強いストレスを感じていると報告している。

Emmit&Minor (1993) は、Gifted 者のキャリア決定上の問題として①キャリア決定の困難さ②キャリア決定の遅れ③専門分野の頻繁な変更④先行投資による最初の選択への行き詰まり感⑤限られた進路分野からの選択⑥能力以下の職業の選択などを先行研究からまとめている。また、Stewarts

(1999) は Gifted 者がキャリア発達と職業決定の際に経験する困難として、①職業選択の限定②職業未決定③職業アイデンティティの形成④職業的意義の欠如⑤早期のキャリア決定⑥他者からのプレッシャー⑦職業的モデルの重要性を述べている。

Gifted 者の独特の社会・情緒的な困難を踏まえると、キャリア決定や職業選択の際に経験する困難も Gifted 者独自の特性に基づく独特なものであると考えられる。

#### 6. 本研究の目的

職業やキャリアの決定は青年期における重要な発達課題であり、これは青年期の Gifted 者にとっても同様であると考えられる。青年期の Gifted 者のキャリア決定を支援することは、青年期から成人期の Gifted 者の社会面・心理面を支援していく中で必要な視点といえる。

そこで本研究では、Gifted 者のキャリア決定に関する研究成果をレビューし、キャリア決定上の問題と関連する要因についてまとめ、わが国における今後の Gifted 者に関するキャ

リア研究の展望を述べる。Gifted 者独特の要因を整理することで、Gifted 者への理解を深めるキャリア研究を行うことができると考える。

## II. 方法

EBSCO と Google Scholar を用いて“Gifted”, “Career Decision (キャリア決定)”で検索を行った結果、Gifted 者のキャリア決定に関する要因とし Multipotentiality (多才性) と Perfectionism (完璧主義) を指摘している文献が多数みつき、その他の要因に関しては散見される程度であった。そこで、Gifted 者のキャリア決定に影響を与える要因を多才性、完璧主義、その他の要因の3つに分けて上述した検索結果から得られた研究成果を整理する。

### III. Gifted 者のキャリア決定要因

#### 1. 多才性: Multipotentiality

Gifted 者のキャリア決定に影響する要因として、多才性 (Multipotentiality) が頻繁に取り上げられている。多才性とは、様々な技能を選択し高いレベルまで発展させていくことのできる能力のことである。Sanborn によって Gifted 者が学校の学習やテストで高い能力を示し、様々な社会的な活動や運動などに参加していることを指摘されたことから、多才性が取り上げられるようになった (Rysiew, Shore & Leeb, 1999)。多才性は Gifted 者のキャリア決定上に影響を与える要因であると考えられており、Gifted 者のキャリアカウンセリング研究者は、当事者への理解を深めるために重要な要素であると捉えている (Keer & Sodano, 2003 ; Greene, 2006)。様々な分野で能力を発揮することは、Gifted 者の選択肢を広げるという意味では良い側面もあるといえるが、選択肢を広げることによる問題点も指摘されている。複数の分野で同等程度の能力とモチベーションを持っていることにより、キャリアの選択の間で揺れ動くことになり、キャリアの決定を妨げる要因となっている (Rysiew, Shore & Leeb, 1999)。また、複数の選択肢で迷うことで決断を困難にし、進路の決定が先延ばしになる可能性が考えられる。多才性は、キャリア決定上の問題である進路決定の困難さ、進路決定の遅れや職業未決定、専門分野の頻繁な変更などに影響していると考えられる。

Gifted 者のキャリア研究が行われ始めた初期から、多才性とキャリア決定の関係が取り上げられている一方で、多才性とキャリア決定には関係がないという研究成果も報告されている。Emmit & Minor (1993) は、高校において Gifted プログ

ラムに参加し卒業した Gifted 者 30 名にインタビューを行った。キャリア決定に影響した要因を分析した結果、多才性の問題が報告されたのは 30 名のうち 1 名であったことが明らかになった。Achter, Lubinski & Benbow (1996) は、縦断研究に参加している 1000 名の Gifted 者の調査結果から、多才性を裏付ける結果が得られなかったことを報告している。Ryview (1994) は、9 年間の追跡調査の結果、多くの Gifted 者が多才性の特徴を有している可能性があるが、キャリア決定への影響については実証的な証拠が得られなかったことを報告している。臨床的な視点からは、多才性が Gifted 者の特徴として述べられ、キャリア決定を困難にしていると考えられているが、それを裏付ける研究成果は得られていない。臨床的な報告と調査の成果の矛盾については今後も検討が必要とされる。

#### 2. 完璧主義: Perfectionism

完璧主義は、多才性と同様に Gifted 者に多くみられる特徴として研究が続けられている分野である。不適応的な完ぺき主義は神経症的な完ぺき主義ともいわれており、Gifted 者のメンタルヘルスに影響を与えていると考えられている。Schuler (2000) が 20 名の中学生の Gifted 者に行ったインタビュー調査では、87.5% に完ぺき主義の特徴がみられた。そのうち、58% は健康的な値であったが 29.5% の参加者は神経症的な完ぺき主義を示していた。健康的な完ぺき主義は、責任感の強さ・組織的・協調的・努力家の特徴がみられ、両親から自己のベストを尽くすことを励まされていたのに対し、神経症的な完ぺき主義は、間違いに固執しており、慢性的な不安状態であり、すべてにおいて完璧であることを家族や仲間が求めていると認識していた (Schuler, 2000)。

神経症的な完ぺき主義である Gifted 者は、間違いを犯すことへの恐怖からキャリア決定を先延ばしにしたり、最も良い選択を知っていると感じている周囲の大人の判断に従ってしまう可能性がある (Greene, 2006)。また、最善の選択をしなければならぬことへの不安は、キャリアの未決定を長引かせる傾向にあることを Sampson & Chason (2008) は指摘している。キャリア決定を先延ばしにすることで、結果的に選択肢が限られ選択の必要がなくなることが、先延ばしに影響していると考えられている (Sampson & Chason, 2008)。完璧主義は、Gifted 者のキャリア決定上の問題として指摘されている進路決定の遅れや職業未決定に大きな影響を与えていると

いえる。

一方で、完璧主義とキャリア決定の関係について実証的に検討した研究は多くない。完璧主義とキャリア決定の関係も、多才性と同様に臨床的な視点から得られた見解である。実証的な研究としては、Emmit&Minor (1993) の調査研究が挙げられる。彼らは、インタビュー調査から明らかとなったキャリア決定に重要な要因として、5つのクラスターを報告しているが、完璧主義は特に大きな要因の一つであることを指摘している。今後は、完璧主義とキャリア決定の関係を実証的に検討する必要がある。

### 3. その他の要因

多才性や完璧主義は、キャリア決定上の問題に関係する要因として度々言及されている。これらは、キャリア決定に大きな影響を与えていると考えることができるが、多才性と完璧主義以外にも考えられる要因があることが指摘されている。

キャリア決定において、Gifted 者にはキャリアの選択肢を限定する傾向にあることが報告されている (Marshall, 1981 ; Achter, Benbow, & Lubinski, 1997)。小学校期などの幼少期から、自分のキャリアを選択し、その分野に打ち込む Gifted 者が多くみられることを Marshall (1981) が報告している。Early Emerger (早期の出現/台頭) によって個人の活動に集中してしまうことで社会との交流の機会が少なくなり、職場での人間関係の構築に課題ができる可能性がある (Marshall, 1981 ; Greene, 2006)。Early Emerger は、Gifted 者が職業や進路を限られた選択肢から決定しようとする問題や早期のキャリア決定の問題に影響していると考えられる。早期に一つの分野に集中してしまうことでその分野から離れづらくなっていると考えることもでき、Emmit&Minor (1993) が指摘した「先行投資による最初の選択への行き詰まり」という問題にも影響している可能性がある。Early Emerger に関係する要因として、非同期的な発達の影響が指摘されている。知的能力の高さと非同期的な情緒面の発達が、成熟した進路決定を困難としている可能性がある (Greene, 2006)。また、Gifted 者の心理的な反応の激しさ (OE) が、特定の分野を追求するエネルギーとなり、一つの分野に集中することでキャリアの選択肢を限定することにもつながるとも考えられる。非同期発達や OE 等、Gifted 者の特性もふまえ、キャリアの選択肢を限定的にになってしまうことに影響している要素を検討していくことが必要とされる。

また Emmit&Minor (1993) は、インタビュー調査の結果、キャリア決定に影響した要因として①高い感受性②完璧主義③心理社会的発達④知的能力⑤多才性の5つが明らかになったことを報告している。その中でも、高い感受性と完璧主義は参加者から特に多くみられた要素であった。高い感受性は、Gifted 者に多く見られる OE (過度激動/過興奮性) とも通じる特徴である。高い感受性には、他者の期待に敏感であること、周囲との関係に基づくプレッシャー、責任感の強さ、他者の助けとなるような職種に就きたいという希望、周りより優れていなければならないという周囲の期待などが含まれている (Emmit&Minor, 1993)。他者の期待に敏感であることや責任感の強さは、より望ましい選択をすることへのプレッシャーと考えることもでき、完璧主義にも通じていると考えられる。

Greene (2006) は、先行研究の結果を取り上げ、義務感や家族の期待に敏感になることで本人が本当に望んでいない専攻や大学を選ばざるを得なくなることがあると報告している。高い感受性はキャリア決定に影響を与えていると考えられるが、この分野に関してはあまり研究が進められていない。

キャリア決定に影響した知的能力としては、挑戦したい願望や多様な分野への興味、学び続けることへの願望などが報告されている (Emmit&Minor, 1993)。これらの要素は、Gifted 者に多くみられる知的分野での特徴だが、Gifted 者に特有のキャリアへの願望であるとも考えることもできる。このような願望は、Gifted 者が職業を選択するうえで重要な要素となっている可能性がある。特有のキャリアへの願望は、Gifted 者の職業的モデルの重要性を示唆している可能性がある。

心理社会的発達は Gifted 者に特有のものではなく、青年期に想定される心理面、社会面の発達課題である (Emmit & Minor, 1993)。先述したように、キャリア決定・職業選択は、青年期の代表的な発達課題である。青年期だけではなく各段階における発達課題とその課題への向き合い方などを Gifted 者と Non-Gifted 者で比較検討していくことで、双方の課題への理解を深めることができると考えられる。

### IV. 今後の展望

Gifted 者のキャリア決定に影響を与える要因として、多才性や完璧主義を中心に、非同期発達や OE などの特性、高い感受性や周囲の期待などが検討され、研究が進められている。以上の結果をふまえ、本章ではわが国における Gifted 者のキャリア研究の今後の展望を述べる。

わが国における Gifted 者へのキャリア支援を考えるにあたっては、Gifted 者がキャリア決定上と感じている困難の調査が必要とされる。Gifted の子どもたちのための教育プログラムが行われている諸外国と、行われていないわが国では Gifted 者への理解の程度も違っており、大学や職場などの社会で感じる困難にも違いがあると想定される。多才性や完璧主義など Gifted 者に多くみられる特徴に基づくと考えられるキャリア決定上の問題はわが国でも同様にみられる可能性があるが、高い感受性や周囲の期待など社会面の影響が強い要因に関しては、諸外国とは違う状況にあると考えられる。そこで、まずは、わが国の Gifted 者のキャリア決定上の困難や、キャリア決定に影響を与えた要因についての仮説生成型の研究が必要とされる。次に、Emmit&Minor (1993) の研究で年代によるキャリア決定要因の違いがみられたことを踏まえると、キャリアステージや発達段階に着目した縦断的な調査を行うことでライフステージに沿った支援のあり方を検討することができる。また、諸外国の文献を通して、Gifted 者と Non-Gifted 者を比較した研究はあまり行われていない。Gifted 者へのキャリア支援を考えるにあたっては、Gifted 者のキャリア決定上の質的な違いに着目した調査が必要とされる。Gifted 者と Non-Gifted 者を比較し検討することで、それぞれのキャリア決定上の特徴への理解を深めることができるだろう。

先述したが、わが国での Gifted 者のキャリア決定に関する研究を進めるにあたり、諸外国で指摘されている多才性の臨床的な見解と実証的なデータの矛盾には留意する必要がある。多才性のキャリア決定への影響は 1900 年代から報告されているが、近年の研究で多才性の影響に疑問が寄せられている点を考えると、1900 年代当初と近年の社会状況の違いが原因となっている可能性も考えられる。また、量的な調査では明らかにされない質的な問題が影響している可能性もある。興味に基づき多才性を判断するのか、実績に基づき多才性を判断するかによって違いがあることも考えられる。一人ひとりのこれまでの経路もふまえて、量的・質的に多才性を分析することが重要となるだろう。また、完璧主義とキャリア決定の関係については、完璧主義の認知の違いに着目した研究も有用であると考えられる。完璧主義のメンタルヘルスへの影響に関して、完全性を他者から求められていると感じる“社会規定的完全主義”と抑うつや絶望感との関連が指摘されている(桜

井・大谷, 1997)。Gifted 者が完璧主義に至る認知に着目し、社会適応やキャリア決定との関連について調査し、分析することで、キャリア選択場面での完璧主義の影響をより丁寧に検討することができる。と考える。

## V. 引用文献

- 安達智子 (2001) . 進路選択に対する効力感と就業動機, 職業未決定の関連について. 心理学研究, 72(1), 10-18.
- 安達智子 (2004) . 大学生のキャリア選択. 日本労働研究雑誌, 533, 27-37.
- 安達智子 (2021) . キャリア決定—未決定の規定因—大学生, フリーター, 無業者の比較から—. キャリア・カウンセリング研究, 23(1), 15-23.
- 浦上昌則 (1993) . 進路選択に対する自己効力感と進路成熟の関連. 教育心理学研究, 41(3), 358-364.
- 浦上昌則 (1995) . 学生の進路選択に対する自己効力感に関する研究. Bulletin of the School Education, Nagoya University(Educational Psychology), 42, 115-126.
- 小泉雅彦 (2014) . 読み書き困難を持つ知的ギフテッドの支援. 子ども発達臨床研究, 6, 131-136.
- 小泉雅彦 (2016) . 認知機能にアンバランスを抱えるこどもの「生きづらさ」と教育: WISC-IV で高い一般知的能力指標を示す知的ギフティッド群. 北海道大学大学院教育学研究紀要, 124, 145-151.
- 小林茂 (2021) 日本における gifted という語の受容の課題. 札幌学院大学心理学紀要, 3(2), 1-11.
- 桜井茂男・大谷佳子. (1997). “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係. 心理学研究, 68(3), 179-186.
- 下山晴彦 (1986) . 大学生の職業未決定の研究. 教育心理学研究, 34(1), 20-30.
- 萩原俊彦・櫻井茂男 (2008) . “やりたいこと探し”の動機における自己決定性の検討—進路不決断に及ぼす影響の観点から—. 教育心理学研究, 56(1), 1-13.
- 日高茂暢 (2018) . 知的ギフテッドにおける知的特性と生活適応行動に関する検討—知的検査 WISC-IV と Vineland-II 適応行動尺度の分析—. 作新学院大学大学院心理学研究科臨床心理センター研究紀要, (11), 18-25.
- 本郷一夫・松本恵美・九里真緒 (2022) . 知的ギフテッド児の発達特徴と学校適応に関する研究. 東北教育心理学研究, 15, 39-52.

- 松本茉莉衣・是永かな子 (2017). 日本のギフテッド当事者に対する特別な教育的ニーズに関する聞き取り調査 (第3報). 高知大学教育実践研究, 31, 135-143.
- 宮尾益知 (2019). 発達障害と不登校—社会からの支援がない子どもたち: 2E の観点から—. *The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine*, 56(6), 455-462.
- 文部科学省 (2022) 特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導支援の在り方等に関する有識者会議 審議のまとめ. [https://www.mext.go.jp/content/20220928-mxt\\_kyoiku02\\_000016594\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20220928-mxt_kyoiku02_000016594_01.pdf) (最終閲覧日: 2023年11月28日).
- 若林満・後藤宗理・鹿内啓子 (1983). 職業レディネスと職業選択の構造. *Bulletin of The Faculty of Education*, 30, 63-98.
- Achter, J. A., Benbow, C. P., & Lubinski, D. (1997). Rethinking multipotentiality among the intellectually gifted: A critical review and recommendations. *Gifted Child Quarterly*, 41(1), 5-14.
- Achter, J. A., Lubinski, D., & Benbow, C. P. (1996). Multipotentiality among the intellectually gifted: "It was never there and already it's vanishing". *Journal of Counseling Psychology*, 43(1), 65-76.
- Blass, S., (2014). The Relationship Between Social-Emotional Difficulties and Underachievement of Gifted Students, *Australian Journal of Guidance and Counseling*, 24(2), 243-255.
- Emmett, J. D., & Minor, C. W. (1993). Career decision-making factors in gifted young adults. *The Career Development Quarterly*, 41(4), 350-366.
- Fornia, G. L., & Frame, M. W. (2001). The social and emotional needs of gifted children: Implications for family counseling, *The Family Journal*, 9(4), 384-390.
- Greene, M. J. (2006). Helping build lives: Career and life development of gifted and talented students. *Professional School Counseling*, 10(1), 34-42.
- Holland, J.L. & Holland, J. E. (1977). Vocational indecision: More evidence and speculation. *Journal of Counseling Psychology*, 24(5), 404-414.
- Karnes, F. A., & Oehler-Stinnett, J. J. (1986). Life events as stressors with gifted adolescents. *Psychology in the Schools*, 23(4), 406-414.
- Kerr, B., & Sodano, S. (2003). Career assessment with intellectually gifted students. *Journal of Career assessment*, 11(2), 168-186.
- Marshall, B. C. (1981). Career decision making patterns of gifted and talented adolescents: Implications for career education. *Journal of Career Education*, 7(4), 305-310.
- Piechowski, M. M. (1979). Developmental potential. *New voices in counseling the gifted*, ed. Colangelo, N & Zaffrann, R. T. 25-57, Dubuque, IA: Kendall/Hunt.
- Rinn, A. N., & Bishop, J. (2015). Gifted adults: A systematic review and analysis of the literature. *Gifted Child Quarterly*, 59(4), 213-235.
- Rysiew, K. J. (1994). Multipotentiality in gifted youth: a nine-year follow-up study (Master Thesis). <https://escholarship.mcgill.ca/concern/theses/g732db68b>, (最終閲覧日: 2023年11月28日)
- Rysiew, K. J., Shore, B. M., & Leeb, R. T. (1999). Multipotentiality, giftedness, and career choice: A review. *Journal of Counseling & Development*, 77(4), 423-430.
- Sampson Jr, J. P., & Chason, A. K. (2008). Helping gifted and talented adolescents and young adults: Make informed and careful career choices. *Handbook of giftedness in children: Psychoeducational theory, research, and best practices*, ed. Steven I. Pfeiffer, 327-346, Boston, MA: Springer US.
- Schuler, P. A. (2000). Perfectionism and gifted adolescents. *Journal of secondary gifted education*, 11(4), 183-196.
- Stewart, J. B. (1999). Career counselling for the academically gifted student. *Canadian Journal of Counselling and Psychotherapy*, 33(1), 3-12.
- Webb, J. T. (1994). Nurturing social emotional development of gifted children, *International handbook of research and development of giftedness and talent*, ed. K. A. Heller, F. J. Monks, & A. H. Passow, 525-538, Oxford, England: Pergamon Press.